

随想

いつの間にかの傲り

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

中国の生産会社で、新入社員への教育セミナーで訓示を依頼された。今月(十一月)のことである。その前日に社長と幹部との食事中に『あなたの働く姿や考え方を新入社員たちに紹介するストーリーを考えてほしい』とある幹部社員に頼まれた。著書は答えた。

『ストーリーは考えません。集まる人たちの顔を見てから、何を語るか決めましょう』と……

新人たちは六〇人余り。その他幹部やマネージャーたちを含めると八〇人ほどである。

当日会場で紹介されたのは『新人たちは生産物、品質管理部、計数管理部、経理部、販売部、宣伝部、販売拡張部、総務

部』であり、この会社のすべての部門で今年採用した社員全員とのこと、年齢は二〇〜四〇歳にわたる。

話す時間は三〇分以上であること以外は任せる、という。

『話す相手がこれほどバラバラで絞れないなら、やはりテーマは決まなくて良かった!』とは思うものの、ストーリーは決めている(結構いつものことではあるが……)。

結果『仕事と人生』を中心に一時間ほど話した。質疑応答を含めて二時間近くが過ぎた。

話しながら聴講する真剣な顔々を見渡し、いろいろなことを考えた。『これらの人々はこれからどんな業務に就き、どの

ように考えながら毎日を過ごすのだろう』『何人がこの会社で何年、どのように働き、その後どんな生活を送るのだろう』『ライン・ワーク? フレックスな労働? 考えることが中心? 単純な業務?』『単純な業務に従事しながら、創造的に働けるのか?』

それから二日後、綿陽市(四川省)から深圳市への移動中に『平家武人伝(嶋津義忠著)』を読んでいたら、心に残った記述があった。

平重盛の項に『仏御前』の逸話がある。重盛が肺を病んで死に至る場で、乳兄弟・重衡とその嫡男・維盛に語って聞かせる。清盛に愛された白拍子、祇王と

祇王に引き立てられた仏御前の話である。若く、美しく、芸事にもたけた祇王を清盛は慈しみ、その妹と母をも含めて豪宅に住ませ大事にしていた。三年も過ぎた頃、京に仏御前というさらに若い白拍子が噂になった。仏は何とか清盛に認められたく、じかに清盛を訪ねたが、祇王を愛する清盛は会おうとしない。しかし、門前払いされる仏を哀れに思った祇王は『せめて会うだけでも……』と清盛にとりなす。会うことにした清盛の前で歌舞を披露した仏に清盛は一目でのめり込む。仏を側に置く清盛は、祇王を家族共追い出す。祇王家族は京を離れた庵で剃髪し、仏門に入る。恩をあた

で返した仏は、その庵を訪れる。その時すでに仏は髪を下ろしていた。その後仏を含めて四人は仏門に人生を捧げた、というのがその逸話である。

そして、重盛は乳兄弟と嫡男に語る。

『何が若い女性たちに哀れな人生を歩ませたのか?! わが父、清盛に民を思う心がないからだ。天下は公家・武士・僧侶だけでは成り立たない。日々を支えるのは民である。民は人の暮らしに必要なすべてを作り出す。公家も武士も僧侶も、民の作るものなしでは生きられぬ。それにも関わらず、父清盛はそれを忘れて……。それゆえ民の思いに気づかぬ』

平家の衰退は、民の心を忘れたから、と続く。

今も昔も、主義を問わず、人間の社会はヒエラルキーで成り立っている。ものの生産なしには、人間は生きられない。しかし現実には、東京等の大都市で働く、生きるために必須のもの

のを作っていない多くの人々が(もちろんさまざまな形で働いているのだが)、生きるに必要なものの作りに携わる人々より恵まれた環境や待遇で働いている。社会の構造であり、人間社会は紀元前五〇〇〇年のエジプトの時代からそうなのだから、それはまあいい。

人類の平等をうたう現在であつても、都会人は上級国民であることと自負しがちであること、時にはそれを『あからさま』に示す、いわゆる上級国民がいる。

『ノブレス・オブリージュ』という言葉がある。貴族の責任とでも訳すれば良いのか?! ヨーロッパの貴族は税等の収入で生涯働かなくても良い、らしい。しかし貴族は統治に責任を持ち、戦い、公に命を賭ける責任を負う。それ故に、階層を認められているという。階層を自認する上級国民なら、社会責任を自覚しそれを負わねばならない(と、著者は思う)。

先に上げた平家の物語は、あ

くまで小説(嶋津義忠氏による。注1)であり、記述されていた内容が本当であつたとは思われない。しかし、人間社会はそうあるべきと思うし、多分、嶋津義忠氏もその基準を共有する人なのであろう。

理想主義に過ぎるかもしれないが、ヒエラルキーの上に立つ層は社会を下から支える人たちへの思いを大事にしなければならぬ、と信じる。

生産の現場は地味で単調な作業の積み重ねである。束ねる立ち位置の仕事は、概して変化に富む。変化への対応力がないと、セクション(組織)を上手く求められない。確かに誰にでも、すぐにできない業務ではある。誰にでもすぐにできないから特殊性への見返りとして、社会からの報酬が多くなる傾向がある。それは、上級なのだろうか?!

著者は生産現場に携わる人々とできるだけ親しく語るようにしている。現場の担当者だから

感じる『肌感覚』で得る情報は、その人しか持たないものである上、それがどれほど大事で有効な情報であるかを、担当者自身が知らないこともある。これらの情報を得る、そして真の意味でその情報を共有したいからである。またそれらの人々と間近で触れ合うことで、お互いを認め合えるから……

注1…嶋津義忠。一九三六年、大阪生まれ。一九五九年、京都大学文学部卒業、産経新聞入社。化学会社代表取締役社長を経て、作家に。主な著書に『乱世の光芒 小説・石田三成』『幸村家康を震撼させた男』『上杉鷹山』『明智光秀』『竹中半兵衛と黒田官兵衛』『小説 松平三代記』『柳生三代記』『上杉三代記』『楠木正成と足利尊氏』『信之と幸村』(以上、PHP研究所)『平蔵の槍』『天駆け地狙く』『甲賀忍者お藍』(以上、講談社)『平蔵幻視』(小学館文庫)等。